

フランス都市部郊外の大衆地区における移民の家庭教育

—社会統合と文化伝承のはざままで—

一橋大学大学院・日本学術振興会特別研究員 DC2 村上 一基

1. 目的

本報告の目的は、フランス都市部郊外の大衆地区で子どもを育てる親—特に移民を背景に持つ親—の教育問題を、子どものフランス社会への統合と家庭内での文化の伝承の関心に着目し、考察することにある。

フランスにおいて、1980年代以降、都市部郊外の大衆地区は、社会的排除やセグリゲーション、移民問題などと関連する主要な社会問題のひとつをなしてきた。この「郊外問題」において、家族はその重要な争点のひとつをなす。家族、特に移民を背景に持つ家族やひとり親家族、大家族は親の監督欠如や「教育放棄」を批難され、子どもの学業挫折や非行は親の教育の問題と結びつけられてきた。

しかしながら、こうした親は本当に教育を放棄しているのだろうか。郊外の大衆地区や移民の教育に関する先行研究は、もっぱら学校教育の問題からアプローチしてきたが (Van Zanten 2001 ほか)、地区に住む親は、学校教育に限られないより広義の教育に関心を持っている。本報告では大衆地区に住む移民の親の教育上の関心事を、学校教育、子どもの交友関係、文化伝承の3つに着目し、分析していく。

2. 方法

本報告は、2010年10月から2013年3月まで、パリ郊外の2つの大衆地区で行った調査結果を用いる。調査では、中学生以上の子どもを持つ親、地区で育った若者、中学校の教職員、そして教育の分野で活動するアソシエーションや自治体の職員、計162名にインタビューを行った。

3. 結果

調査の結果、親と学校の間には教育モデルの違いが見られ、移民の親の教育は、フランスの学校が体现する中産階級的な教育モデルとは異なった人格志向教育 (Gans 1962=2006) であった。先行研究では、この学校と家族の間の距離を階級の要因から説明してきたが (Lapeyronnie 2008 など)、本事例では、親たちは出身文化や宗教 (特にイスラーム) にその教育原理を求めていた。2つめの親の関心事としては、子どもの交友関係の問題があり、地区における若者の悪影響や犯罪の危険から子どもを守る重要性が強調された。こうしたなか、親は家族の結束を高め、地区の社会生活から距離をとろうとしていた。そのために、地区に住む移民の親は、子どものフランス社会への統合と家庭内における文化伝承のバランスをとろうとし、家族の価値を高めようとする。家庭内で子どもにルーツを与えることで、こうした親は地区や学校における「有害」な影響から家族空間、そして子どもたちを保護しようとしていた。

4. 結論

移民の親は子どもの学校での成功によって、「制度的」承認をえられ、フランス社会の「支配的」な価値観を共有する感覚をもつことができる。しかし同時に、家庭内で伝統的教育を維持することで、子どもたちに対する威厳を保ち、さらにより広く社会における文化的な承認を手に入れようとしていた。

<文献>

Gans, H. J., 1962, *The urban villagers: group and class in the life of Italian-Americans*, New York: Free Press of Glencoe. (=2006, 松本康訳『都市の村人たち—イタリア系アメリカ人の階級文化と都市再開発』ハーベスト社.)

Lapeyronnie, D., 2008, *Ghetto urbain: ségrégation, violence, pauvreté en France aujourd'hui*, Paris: Robert Laffont.

Van Zanten, A., 2001, *L'école de la périphérie: Scolarité et ségrégation en banlieue*, Paris: PUF.